

---

## 編集後記

この度、京都在宅リハビリテーション研究会誌第10巻を刊行することができました。

京都在宅リハビリテーション研究会が10年間継続できたことは、皆様のご協力のお陰と心から感謝申し上げます。

京都在宅リハビリテーション研究会誌を創刊した翌年、バラク・オバマ氏が“change”を唱えて、第44代アメリカ合衆国大統領に就任しました。そのオバマ大統領も、核なき世界を訴え、現役アメリカ合衆国大統領としてはじめて被爆地広島に歴史的な訪問を果たし、被爆者と抱擁を交わして、8年間の任期を終えます。

この編集後記は第2巻から、オバマ大統領の唱えた“change”の頭文字『C』を使ったKey Wordで記してきました。お気づきでしたか。

さて、この10年でリハビリテーションを取り巻く環境は大きく“change”しました。例えば、介護報酬は2015年に9年ぶり引き下げられました。2016年からは、医療保険からその介護保険へと要介護高齢者の維持期リハビリテーションは移行しました。回復期リハビリテーションでは1日9単位から、1日6単位以上の算定ができない施設が出てくるようです。これらは高騰する医療費を抑制することが目的だそうですが、それらの減額は全てそこで働く人たちの賃金に反映されることになるでしょう。

一方、病院で廃棄される抗がん剤は年間400～500億円、家庭における潜在的な残薬は年間500億円で、合計1000億円が無駄になっています。加えて全て正しいとは言えないでしょうが、2014年に米国で発表された「Choosing Wisely」に該当する医療を削減すれば、どれ程の医療費を抑制できるのでしょうか。

ロボット技術が発達してきたとはいえ、リハビリテーションはまだまだ人の手に頼るところばかりだと思えます。適切な“change”を望みたいものです。

そして適切な“change”といえは、京都在宅リハビリテーション研究会世話人代表も次の世代に“change”しました。

皆様のお力添えがあってこそ、継続できた10年間でした。

本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

そしてこれからも、京都在宅リハビリテーション研究会を宜しくお願い申し上げます。

平成28年11月19日

京都在宅リハビリテーション研究会 世話人代表 松本和久

---

---

京都在宅リハビリテーション研究会誌

第10巻

©平成28年12月23日発行

編集者 京都在宅リハビリテーション研究会事務局  
(松本和久, 木村篤史, 富田健一, 永山智貴, 小西倫太郎, 神田佳明,  
水島佳小里, 森川重幸, 堀田直樹, 浅野翔平)

発行者 松本和久  
〒629-0392 京都府南丹市日吉町  
明治国際医療大学附属病院 総合リハビリテーションセンター  
TEL (0771) 72-1221

印刷所 光和印刷